

海上衝突予防法の灯火の“なぜ”について

その1：なぜ左舷灯の灯色は赤色なのか？

①船灯方式の採用と汽船の航法

- ・1840年“Port Helm Rule”（右舷側通航）—「1846規則」で制定法となる
- ・1848年“Admiralty Notice”—汽船の船灯方式の採用
前部マストの頂部に明るい白灯 右舷側に緑 左舷側に赤灯

②鉄道信号と道路信号（道路交通信号）—手旗、セマホア、灯火

- ・1825年世界最初の鉄道開通—鉄道信号では“赤”「危険」、 “白”「無難」
- ・1841年イギリス鉄道連合会議における灯色の意味
赤色：危険（停止） 緑色：注意（徐行） 白色：無難（進行）
（1876年以降「緑色」は“進行”。“注意”は「黄色」）

③1918年の道路信号（ニューヨーク）では“赤”停止、“黄”注意、“緑”進行

- ・ヨコ型道路信号機では“赤信号（灯）”を危険側—車がすれ違う側—to配置

④なぜ舷灯の灯色に“赤”と“緑”が採用されたのか？

心理的効果—赤は進出色、緑（青）は後退色

⑤左舷灯の灯色に“赤色”を採用したのは「右舷通航規則」を確保するため

その2：なぜ左舷灯の色名は“赤色”ではなく「紅色」なのか？

①1863規則では「Red」と「Green」—日本の予防法は国際規則の翻訳

②「商船規則」（1870年）では左舷灯は“赤”、右舷灯は“青”—暫定

- ・“緑”と“青”の使い分け

③「船灯規則」（1872年）で左舷灯は「紅」、右舷灯は「緑」になった—確定

- ・ルビーと紅玉（リンゴの名前ではない）—人造宝石とルビー・ガラス
- ・薩摩瓦羅斯（ガラス）—紅色ガラス（銅赤）（舷灯用）と透明紅ガラス（金紅）

④江戸時代後期には“赤色のガラス”を「紅色ガラス」と呼んでいた。西洋型汽船

の左舷灯は“赤色のガラス”で出来ていた。そこで左舷灯を「紅灯」とした。

⑤“紅灯”と“緑灯”を「赤灯」と「青灯」とすべきではないか

※着色灯の色調の違い

その3：“白灯”は「白色灯」？

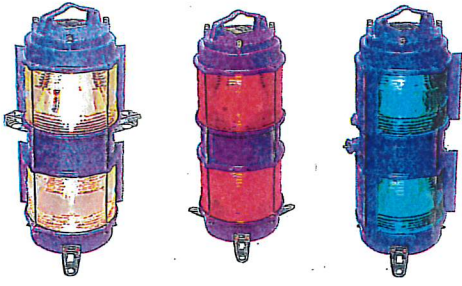
①“白灯”とは“White light”の日本語訳である—bright white light

②“White”の意味とマスト灯—“colorless, uncolored, as glass or other transparent substance”

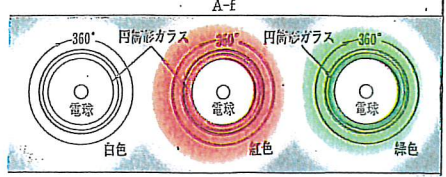
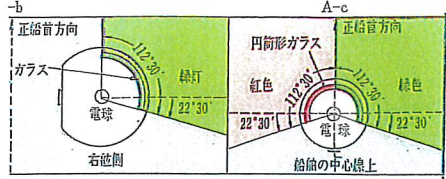
③「本法において「白」または「白色」の灯火は無色の灯火の意味である」

着色灯色調例

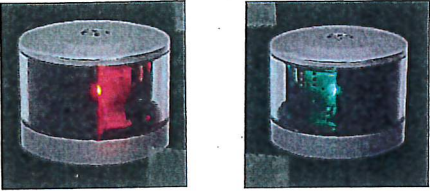
二重式電気船灯



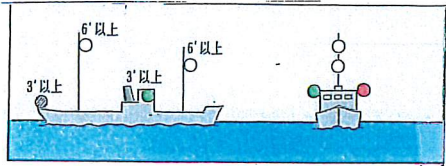
日本船灯
カタログ
(平成10年頃)
※1種白灯・航灯



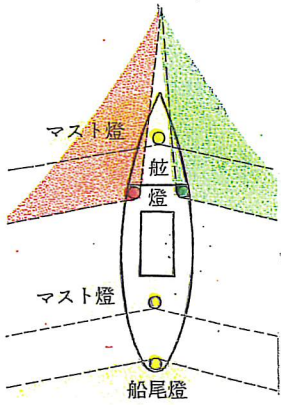
航海訓練所 航海図鑑 海文堂



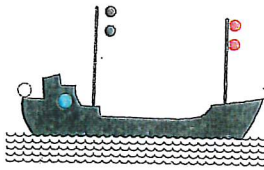
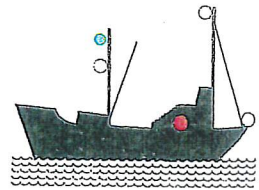
伊吹工業
(LED船灯)
※2種航灯



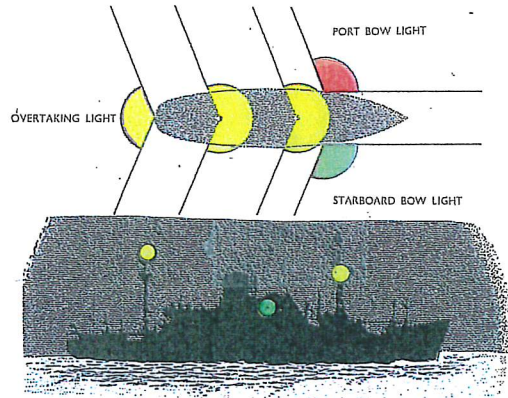
福井 漢 図説 海上衝突予防法 海文堂



大塚昌三
海上衝突予防法 読本
海文堂 (昭和41年)

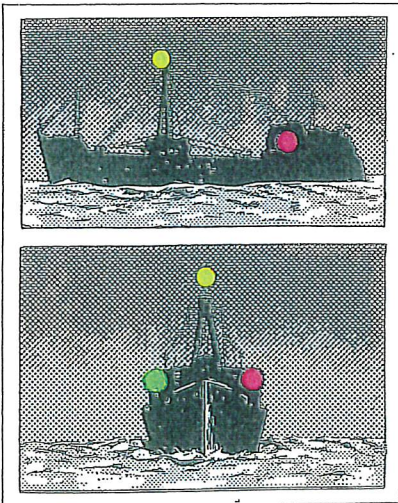


Richard HB Sturt MA
The Collision Regulations
Lloyd's London Press Ltd.



Admiralty: Manual of Seamanship Vol. I

1 LIGHTS, DAYMARKS AND



Admiralty: Manual of Seamanship Vol. II

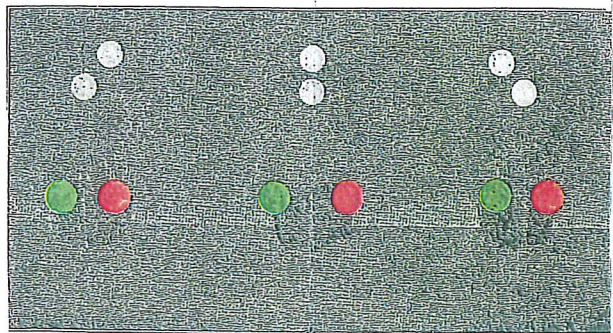
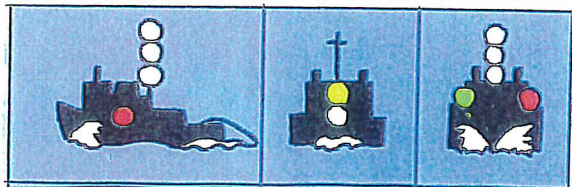


Plate and Diagram for Navigation Class
神戸高等商船学校 (昭和19年)



John Mellow
A Small Boat Guide to the Rules of the Road
Fernhurst Books